蒙求補解

後附

ワ 3
1306
3上

門7邊3
1306
巻 3此

装束要領鈔後附

女官

女房の衣裳并番号乃次第古今相違の事

女房の衣裳古今の記録異同ありていまゝへ今のやう
各別なりしを悉の次第も亦相違せり 往古来今
事物乃沿革此一事のみにあらず時世小活くかくれ
たるの事おほし此乃ごとき八宮季にかゝり
くくたるよりて有りしかたらし
抱語りしを女房乃衣裳うもくくたるを悉志めて

さてまきるゆをかるれて今のかるひよ為かくして
畫土も是をあやまりて、あ〳〵をとにうけ〳〵いま式
ふ〳〵へにいろ〳〵なくして有実をうしなふなり
凡及〳〵ぎれ褂（ウチキ）しいろハ身に着る所の服にて
衣とをいつる是なりけ褂の下にハ単うへは打衣
とりかさねて表着をあくるおひして袴を着し
ちゆひとくりかくを表て裳を付らひうへ
着指の次第凡かくのあるは其中かくあるは
禁色ハ多用ひる色あるをしらるれ女房ハ例の

書多ひいろの唐衣より地をうれ裳うをれをして
して蘓芳なとれ織物かり多ゆりぬをはとひる蔚
は織物のかくさぬうをれゆりて表ひるものを也
常ハ里ひんの色ひ染の唐衣里ひんかるれも
袴りぬを着れるなりと古記より見えをり元織物を
上蔦ポ上蔦まてゆりて中蔦らをハゆりはる例あり
文をいぬ〳〵色ハ志かくをうまりも見てに名あり
衣をハを名より染ひて文を用ひら（松重より松のもやう 薄重より薄のもやう れ彩なり）
をれとを主人乃うゆをれうをぬをとハ二重織物乃

〻〻乃〻〻り又小袿と以るこゝ衣にりおゝいぬ
〻〻紀みハあゝて見ハかゝこゝの代ふゝ〻まるもの
なりゝ小袿よかゝこゝぬゝめる例なゝといあゝう
唐衣裳まて一具ゝゝると物の具と以ゝう候令男
官ハ束帯のゝゝ唐衣裳なゝと略ゝて小袿
着ゝるは衣冠乃ゝゝ移肉くいあゝこゝぬ乃ゝ人みみ
裳唐衣着る例もありと乃ゝゝゝをもく後世物の
具の着ゝ乃ハ先身ゝ小袖白と着てゝゝ袴板引と
着ゝ次小単次ゝ五ッ衣単と下ゝゝて一つゝゝ合ゝう次ゝ紀次小

唐衣ゝ乃ゝいゝ乃唐衣ゝ地ゝゝれ裳ゝゝ紀をゝゝて
ゝて藤芳なゝれ織物ゝゝ乃ゝ衣ゆりぬをたゝゝ
は織物のかゝこゝぬゝゝゝ紀ゆりて着ゝつるものまゝ也
常ハ着ゝゝんの表ハ深乃唐衣着ゝゝんかゝれゝも
袖りぬゝ出れゝなりゝと古記ゝ乃えゝゝ元織物と
ゝ蘭小上蘭まてゆりて中蘭ゝゝハゆりたゝ伊ゝ
文と云ゝ面ハ表かゝくゝゝまゝゝも乃ゝて紀ゝあゝ
衣ゝハゝゝ名ゝ活ひて文と月ひゝ（松重ゝハ松のもやう薄重ゝハ薄のもやうれ彩かり）
ゝれゝゝと主人乃ゝ紀ゝゝぬゝゝハ二重織物乃

〻又〻〻り又小袿と云るこそ思ひおこすいぬ
〻〻紀ゆいわ〻て是ハかゝるこそあの代ふう〻まゝ著るもの
なり〻ち小袿ゆかゝるぬるさめる例なりといふ
唐衣裳まて一具ちゝるを物の具と云り俗今男
官ハ東常のあと〻唐衣裳なしと略して小袿
著るは衣冠乃ゝ〻ゝ指肉くい多〻ゝるぬ乃うへみ
裳唐衣著る例もありとをゝ〻〻〻そもく後世物の
具の著ゝ〻ハ先身に小袖白と著て〻り袴板引と
著〻次小単次に五ツ衣単と下に〻て
一つゝ〻り合〻り次に次に紀次小

唐衣或小袿ゝるゆ所〻ハかゝ〻ゝさぬハ著ゝるなり各著かさめる次み
やう上にゝるハ次第ゝとやうにあ〻らゆるなり
裳をそけ〻り是ハ著やうハ小袖を著初し〻よ来
古今相遠ゝり凡小袖ハ永観已来の事成けるゝや
今世物具ゝ〻〻〻付故実
○小袖白つゝ〻〻〻是いゝ〻へハ著せ〻れゝ〻し也
○又衣是ハ必ゝ〻ゝ袖乃重袿なる〻〻〻或ハかさゝぬ付
ゝり時宜ゝ〻る〻〻〻あ
ゝ〻ゝ〻ゝ色なる又つ〻ゝ孫てゝ〻ハ一つく紅の
平絹を付ゝり小つまをそ袖口に合ゝ〻ゝ是を裏
通〻てゝ〻ゝ〻ゝ不審なり又

いろ〳〵とて太つかけも別いろなるもありハかさね括
手に糸をとほしぬやうにかさねる古来の有識なり
なりと承りぬ糸かけの附ハ裏ハ古儀のかけひの済ふ
色し太つかけ同じかさね乃附ハ文（モン）も皆ハおなしさた
糸かハまりに名にかわき然なりハ文ちれくれ候
表さは紗しかさねの長さ女房の官位によりて長短
ありや女官餝抄にハかさねのたけ八尺九寸とみえたり
又雅亮装束抄に下仕（シモツカヒ）乃衣の長さ五尺五寸袖くち
二尺一寸とみえたれとも今世の色かハちかふを

つむき人ハ衣冬とよふひと色なるか寒にかなふゆゑにと
ひねるなり但衣ハ板引冬ハもりむき人にして衣の
下に着せらるゝなり
○打衣紅乃あやを打てかさねの色は稚（キ）人ハ濃（コキ）打（ウチ）なり
衣冬にか、さね引つてら附大つかさね乃うへに
かさねのなりの色はうすらかし今の世にハ略せらるゝやうにとなりて
濃打とは本式紅乃濃（コキ）なるしか後世ハ紅の濃よ
きるなりうらさねハきぬのたけより六七寸もちかう
うれうし雅亮装束抄にみえたり

○うちぎ上臈小上臈ハ織物にて中下臈ハ織物
綾を著るなり衣ぬりハ下けも袖くをみしく
をめらしうしたくらり
○かくさねハうゑのうへふかさめるをうゑさ
なり松ぬしーあをおのまハれさるやうにるそか
ゑハうしゑさねといしめとたくさり雅すを紫宋
抄よかうさねよハひもをいくをのうくれを
なるあくいをまゑあふとむをして六をちを八すち
もしてかくさねのおほくひのうえうくへよ付

ゑうとをしてくれをも今の世ハ初をいりたみをを
子細ありぶ又書及いろいろのかくさねハ及ゆりぬ人ハ
著さるまなりさ徒とを古昔より女孺（ジュ）ハ書ゑ唐衣
をさるかり年紬ものをハくれをくれをくれをゆ人すや
○小袿（コウチキ）ハ唐衣の代よ著るさねなり台記よ久安六年正月
十九日先日高陽院傳よ宣旨大后語曰唐衣を著ず
小袿を著ぞ小袿を著てかくさねを著ぞ是礼
なりとの給ひ又衣単（キヌヒトヘ）打衣（ウチキヌ）表著（ウハキ）張袴（ハリハカマ）著る
裳唐衣小袿を著ハさる事も見くくり桃花禅尚

の手拭は小袖と和らぎて結て

○紅のうち袴ときいまきかんを但雅すを裝束抄

にはふめれども袖のうち九尺ゆすとみえたり

かしき人は袴はいかにあれども袴はいかにあれ

ども袴なりとゆえり

○裳白羅の裳地摺乃裳下濃裳纈纈裳目染裳

いろ〳〵西宮記ゆえんにうるに今乃世にいたるまで

裳の中に纈纈とゆえり各別の拍あり是もまた

子細はいまだしれず乃纈纈とゆえるはくゝ里ぜ色

の手なり雌結雄結ありて纈と纈と別なるゆえ延喜

縫殿寮式は乃ゝうり衣服令義解ゆ五色の交絲以纈

乃文をそめるといひ和名抄ゆ纈は帛を結て文様をあ

孫愼曰繒の夾花あるをとゝうり乃纈纈は裳にうき

らをかゝうあるをするなり者ときこの地をくゝ里

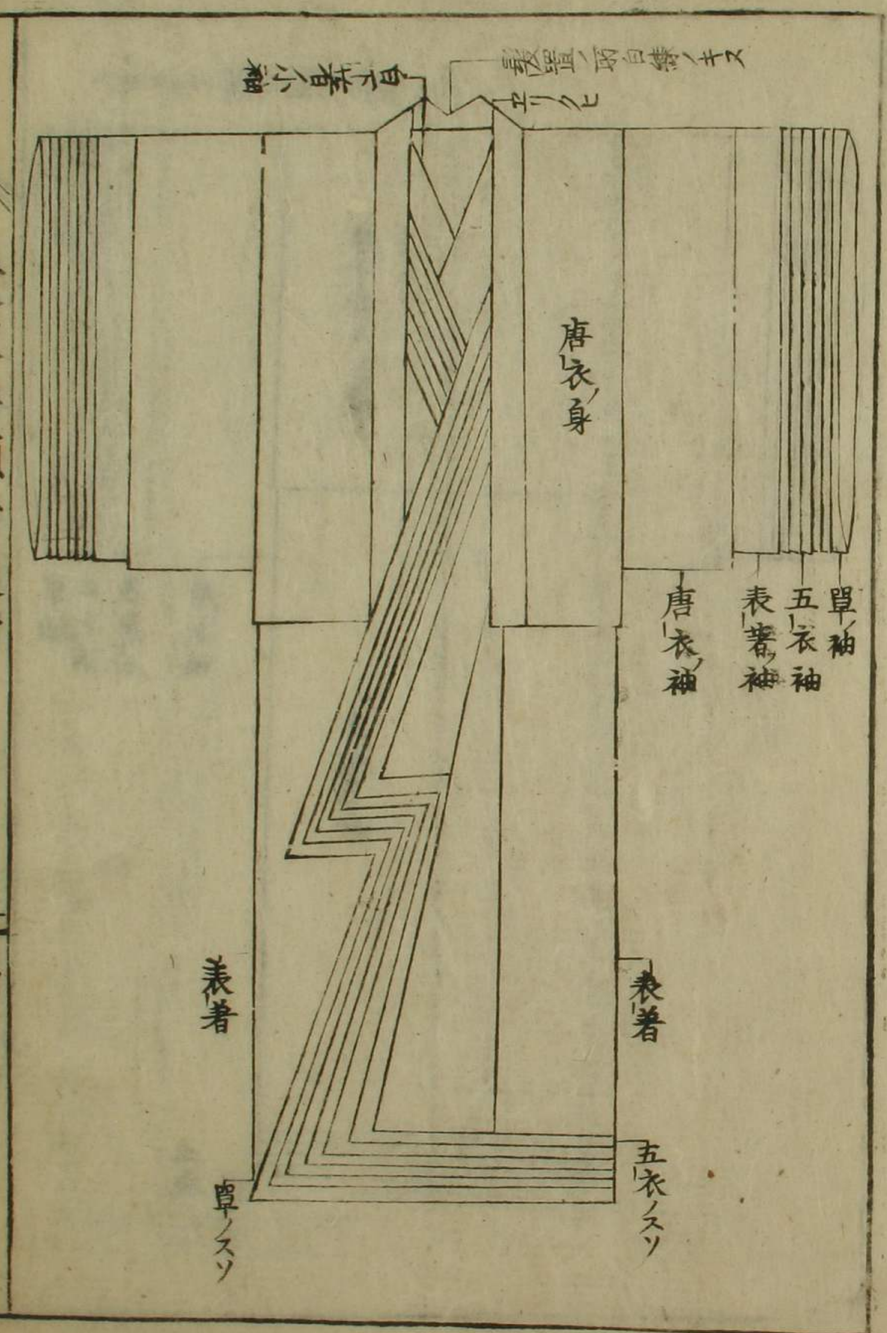
深はするゆうをゆうり裳乃長短も人ゝよりくく

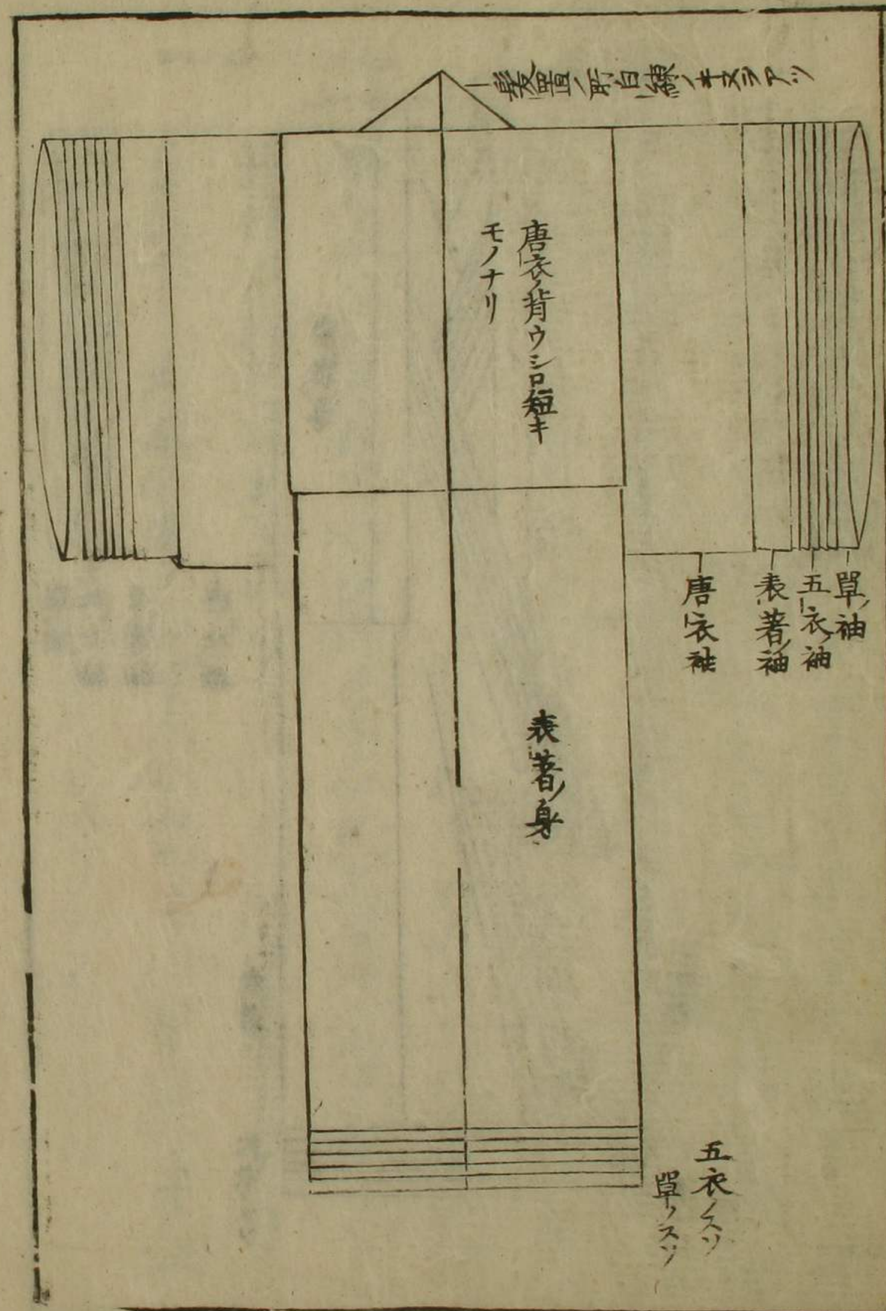
差別ありや女房裝束抄は裳のあゝをうきを一丈おか

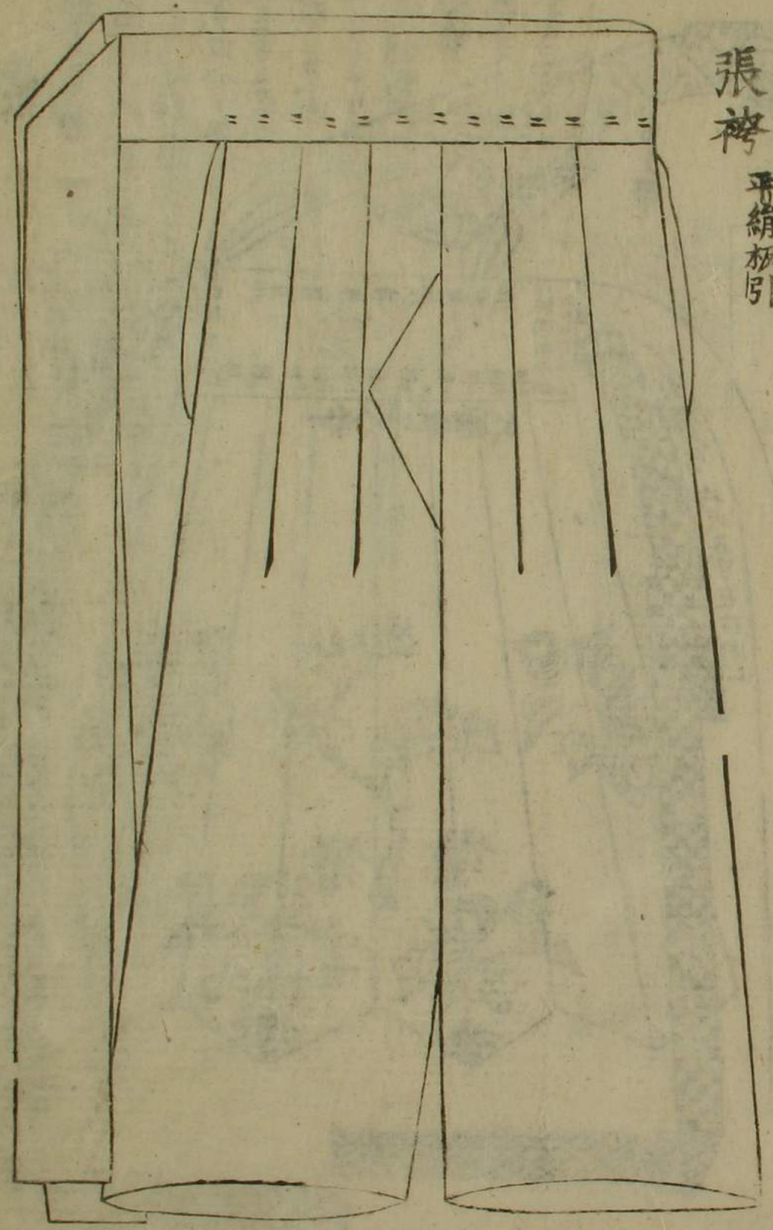
あゝ引ゝうゝ乃ゝうまいをいかうまにくゝん小

うゝなもひくゝれたゝ拍大やうかうあの袖ゝり

出しまつる袍をする也いつまをあを糸にてをさめ初り交
四りたる人まさもんのさぬをきる時を大こうゝ腰を
う紀織袍うゝハをゝへもんの只乃あや交ちゝさうゝ
交ハ生乃うゝさかり袍それもむゝ交乃うゝ袍をゝ大
うゝ引繍うゝハやうゝゝをゝ引こゝの長さ六尺五寸をハ
腰乃もゝ二尺五寸小繍の長さ四尺三寸中倍ハあゝゝと
法乃ゝ交ハゝつまゝおめゝゝへゝゝひゝゝ裳交ハひゝり
うゝあゝゝ大腰の廣さ四寸分小ゝ此ゝさ二寸分
いつまをうハゝゝ乃ひゝゝをゝゝゝゝ乃てゝゝ




唐衣背ウシロ短キモノナリ
表著身
唐衣袖
表著袖
五衣袖
單袖
五衣ノスソ
單ノスソ


張袴
平絹板引

裳

小腰左右ヲ脇ノ下ヨリ前ヘ一ハシテ本ノ帶ノ結目ノ上ニ諸鉤ニ結テ下リメルヲ取合テ平緒ヲカヘスマウニカヘスヘシ下帶ニカヘレミスルカヨキナリ下リハ諸鉤ニ大方腰ノ長サニミル（ヘシト云リ）

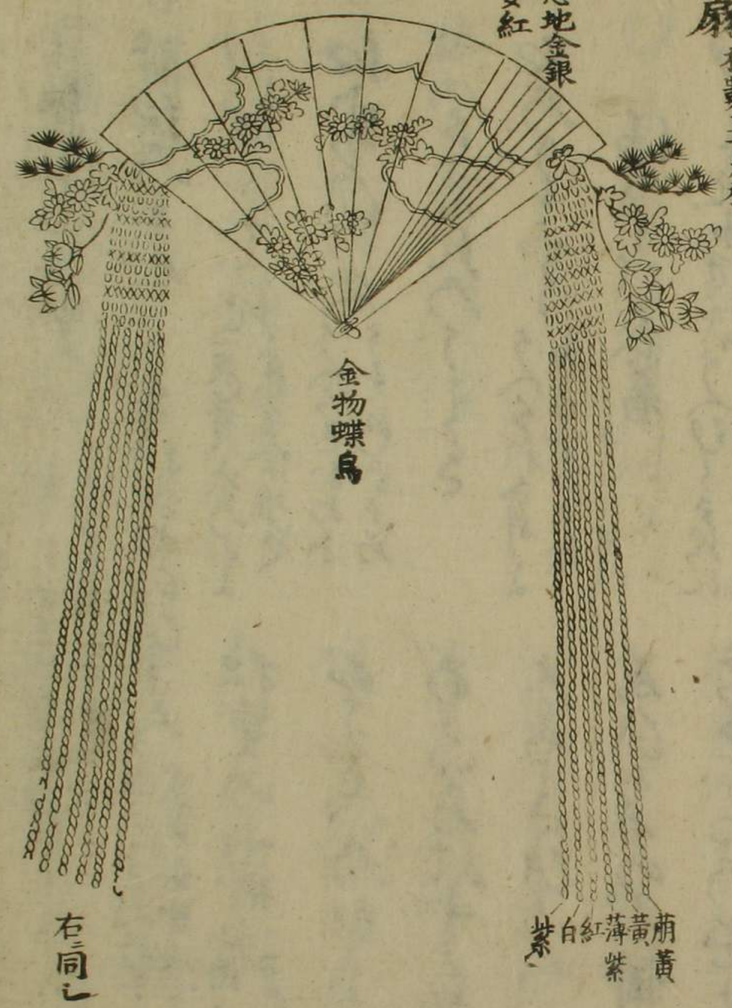
カケ帶

子リノリノ糸ヲ以テ此上ニ置交アリ左右同シ

小腰長サ四尺三寸弘サ二寸五分左右同シ

引腰長サ六尺五寸左右同シ

弘四寸五分



○みゝへの衣裳かさ袖やう四季にいろ〳〵事

春冬乃衣いろ〳〵（是ハ桃華禅閤の女官餝抄の抜萃なり）

○皆紅乃さゝめ　くれかゝるのひとへ（草ハさゝめの下に是も余皆准之）

白さゝら紀（表著ハ衣乃上に是も余准之）　松重の小袿（小袿ハ表著の上に是も余准之）

○紅かゝりの衣（くまかゝるふ是も紅とかさね）

をゝ紀乃うゝさ　あゝいろの紀

○紀乃うゝやう（くれなゐ丹に白さとうさね）　あゝいろの紀小うちき

はくゝれ表著　赤ひとへ

○むゝさ紀ほひ（むゝさ紀に薄紫とかさね）　あひそめの小袿

くまかゝ乃紀と紀

うゝ〻紀のうゝさ

○むゝさ紀のうゝやう（くれなゐふに白さと重ね）

りゝさ紀うゝ紀

○梅のき紀（かゝりて青ろうゝを）

ゆゝいのうゝさ

○紅ほそ紅梅（かゝりて紀青うゝすゝう）

を重紀うゝ紀

○裏濃うゝ紀紅梅（かゝりてこうゝいろ）

りゝ紀のうゝさ

荷葉乃小うちき

くまかゝ丹のむゝさ

紅梅紀小うち紀

すゝゝ乃ひとへ色

ゆゝいろのこうちき

あをさむゝさ

ゆひそめ紀小袿

きはうゝう乃ひとへ

あゝ乃小うち衣

○たうていかさね
　ゑひそめ代うたうさ
○紅梅みほひうへ（紅梅ハ白紅梅と言ハ）
　りえさたういた
○屋なた（おりて）ちろく
　うゝあを
　梅のうさの表紙
○はくゝかさ（おりて）ちろく
　うゝあう花
　紅梅乃うゝた
○やまふた（みほひ山ふさこの衣ハ黄けう衣とかさあ）
　あをた花と色
　多ゝれか井のひゝへ
　りえさたふうちう
　はさりたるむゝ色
　ゑひゝめの小掛
　多ゝきかわ乃ひゝへ
　ひうゝろたこうちた
　くれな井の単
　すゝゝれふうた表
　あをた花と色

ゝ色さのうゝた
○花山吹（おりて薄打葉）
　うゝ黄ゝろ
　うゝ山吹乃表紙
○裏山ふさ（おりて黄い紙）
　うゝくれあを
　魚（ギョレウ）淺乃うゝさ
○紅ゝ（おりてすゝ）
　うゝゝきろあ
　松かさ〇のうゝた
○はゝ（表ゝゝ）
　裏あゝ
○萩うさね（おりてうゝ）
　うゝあゝ

ゑひ深のふうちう
　紅梅イ
　くゝ色ふ井れひゝへ
　あをたこうちた
　ひのをさむゝ色
　ゑむゝめ乃小掛
　青た花ゝへ
　山吹の小うちき
　今梅
　単。表紙ハ小掛ハ乃ゝた不審
　くれかわ乃ひゝへ

うす山吹のうちき

○えくく濃淡をつけ紅梅のうちき

紅梅のうちき

○うへ白き六枚紅の濃淡さ二重ぞめきこれうちき一かさね

多徳かさねのこれうすき二重ぞめにせつかさねるべし

すちうめのうちき

りん紅の小うちき

○白うちやううへもかさねを白紅とふすや

こうばいのうちき

○松うち絲おりて黄

紫

黄うちきの乃小うちき

くれなゐ紅むらへ

もえぎの小袿

○かた鶯おりてすはう

うちあり花

ほうちうめうちき

○さくら萌黄おりて萠木

うちいのうちき

紅梅のうちき

○あひう紫乃衣なりてすはう

うち花田

もえぎ紅梅黄

紅乃花もえ色

こうばいの小うちき

柳乃小うちき

くまなの井のひらへ

すはう形小袿

紅乃花もえ色

此中梅紅梅八十一月不節より二月まて桜山吹八

三月より三月花もえ三月屋敷もえいろくも

付をきこめをいの四月いかのそせのさめすもこそれ〳〵の
いろ〳〵ぬりられいさめの地をゝ唐織地二重織地
只乃ぬり地あや行めの帯をゝ子細あるまゝ白ゝい
常はおほやをうこゝをおへゝ又衣服帯作
き中絵ゝこゝ清方い七もハをゝ又十も附ふりかゝ糸
ら色い只今の人い又より糸いゝゝ用ひいをゝ又うちく
もこゝ一ゝ単とかゝ〇ゝても用うゝ三三かゝ〇ゝ
子細なくいう紀小うちゝかゝゝい二重織地又ハ固織地

夏乃ゝ〳〵めれ衣いろ〳〵

○薄かゝね

松ゝ〇乃ゝう紀

○卯のゝ松おりて志ろく

白ゝ色ゝ井ゝ表着

白紀ゝ〳〵れゝ

紅のふうらき

白ゝすゝ〳〵の単

ゝ〇ひゝそめれ小袖

はゝ乃ゝ色〳〵ゝ先ゝみ志ゝ清ゝふゝおゝ形〳〵四月中いのゝ
のゝゝめすゝゝい単い衣更乃むゝ〇ゝ精好のすし
いつゝ色めをゝかゝ〇ゝられいゝ又賀茂祭の日いゝゝ〳〵乃
又衣をゝりゝ〳〵ゝ事をゝいゝ

五月五日ちり秋まてはさぬのいろく

○あやめはひとへうすね　表青　裏紅梅　すちうのうへ

二あわのかうち紀

○花橘のむとへかさ　表くちなし　裏青　赤紙のうちき

そのうへこうちき

○かてこはひとへうすね　表こうこい　裏青　表着

紅のこうちき

○萩芳はひとへかさ　綾のうへ

二ひのわのかう御　そのあへしのうへ紀

○萩のたて青のむとへかさ　裏もえぎ　赤紙のうちき

すちうれうの紀

○萩のむとへかさ　なてしこ　裏青　女帝紀の小袿

多徳の弁の小うちき　そのあへしのうへ

○女郎花のひとへかさ　表たて青　裏黄　紅のうへ紀

あういろのこうちき

○うぐいすのむとへかさね　あうすちうのうへ

松かさの紀小袿

○紅の花とへうす　二あわの表着

くち紅のいろ紅　女郎花のうす紅

○二藍はなだ　志ゐらさ表着

すはうのこうちき

○ちひ染のひと色かさね

ちはやかさねの小袖　紅のうす紅

○ちろきぬ　ちろ絲

ちこの丹はなだ小うち衣

花ゝかさね　ひとうへはすゝしはなだ織物或はうすもち綾

下はあやのひとへ　ちろかさね　ひとへ

平絹のうち物なゝ紙のうち物又綾と紋の文ゆを染そうて

ちゆのなりあやめゝうち花は六月中かてこゝを

六月まて女郎花蘇方抵蓋の金うち秋のうちめさ

かゝくい表紙小うち紙は皆ゝゝはなだ織物或は二重

織物をゝ上さ洲八月ひとへなり

九月九日ゝはなだきぬ織物

○菊をみち又紙のゆをあてもゝ又紙すゝにうち紙編

八ゝ月ひいよをはなだ命ひ沙ゝん

十月ゝ索五節まゝ命乃きぬいろ

○菊乃浦衣（うらぎぬ）　表すはう　白ぬ
　下三ところ
　　あをさひとへ
　　芙蓉襲のうちさ　表芙　裏青
　　龍膽（りうたん）乃小袿　表すはう　裏青
○紅葉重ね　芙色三山吹のこ紅　すはう　裏紅　ちさ　裏紅　一つかさねるなり　合八つかさねるなり
　　くまを丹乃むらへ
　　芙きくれ小うち衣
　　蔦乃うへ紅
○白菊　たりて　ところ　裏すはう
　　紅の花ぬひ
　　芙きくろうち紅
　　そつうちこうちき
○芙菊　たりて芙　裏青
　　くまなゐの百へ
　　ところさうちさ
　　あを波乃ぬうちさ

○うちひらく　おりて中紫　裏ちとせ
　　紅乃ひとへ
　　松宣れうち紅
　　あを紅小袿
○芙りみち　おりて芙いろ　裏そそう
　　くまぬれ花へ色
　　すはうろうちさ
　　まきこうちさ
○ち紅紫　たりてすはう　裏芙
　　多孔か丹の単
　　ところめれ表着
　　すはう乃小うち衣
○かえて紅紫　表うち青　裏芙
　　藤芳れ色へ
　　紅乃うちさ
　　ところめのこうちき
　　はれいろ〳〵ハさ紅よ芙色れ多乃面に青〳〵おりぬ

以上後成恩寺殿下乃法物のうちより出形しぬ

今按かゝる衣さゝる時ハ小うちきハうちひらきたいくて

しゝく上に出形しぬ

ゆゑハ女のたゝうそくなれ

○かさゝ人ハ童女れうゝ為るもの也

樒乃ゆきこと菊英おうてい花なとハうゝくかさみなくく

ゆゑひきてとゝひ又ハ玄ハぱくしぱるゝ友ハ青打紫

ぱらとこいゝ新葉集ゝ兼昌ゝ哥

ゆゑゝ乃ゆゑふなる小し女子ゝかさゝ人乃すそれかゝゝ世

そゝとみそゝうれうしゝ袴のなゝさ一丈ゆ尺まゝ

一丈二尺ゝ為ゝのゝてのゝちあなるゝゝゝゝ下ゝゝと左右の脇乃下

ひくゝ　ゝてハ二のゝて二尺二すゝうゝゝれ為ゝ二尺三す

くひゝゝハかりゝゝゝゝひのやうにゝれかりおほくひも

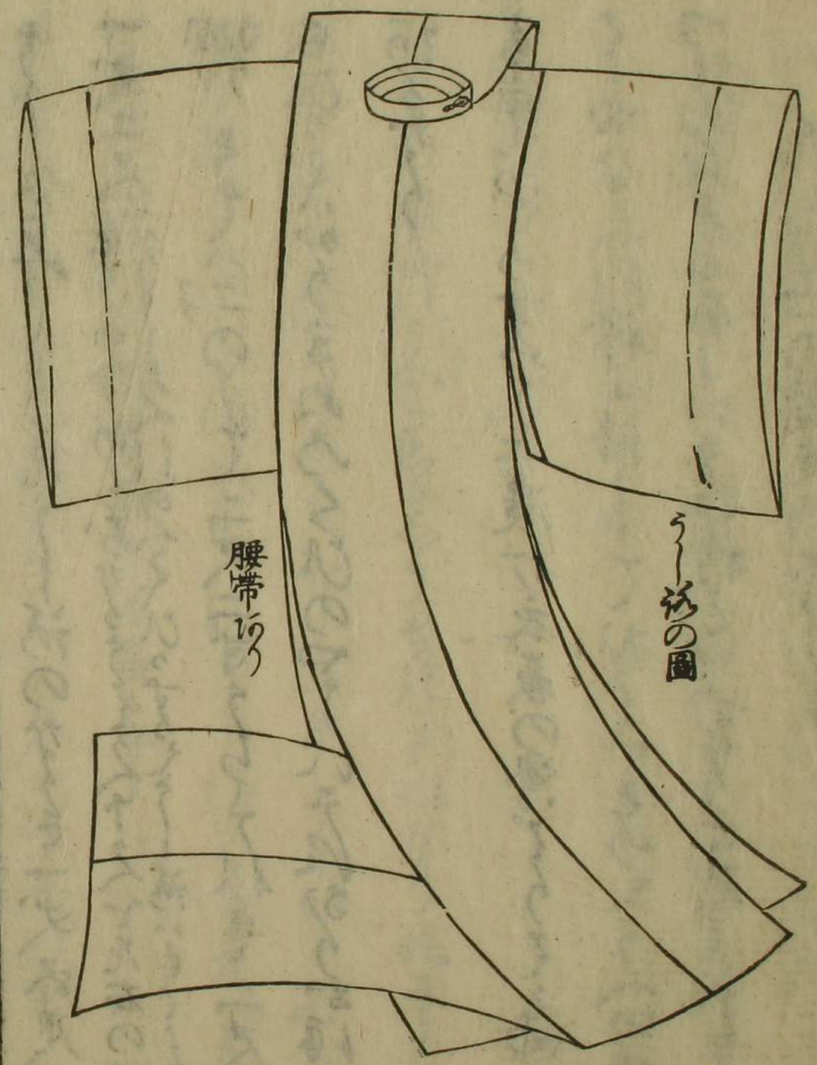
ゆるなり

○青早ゆこめすゝゝ二濃打衣表の袴ぱゝゝゝゝ為ゝ

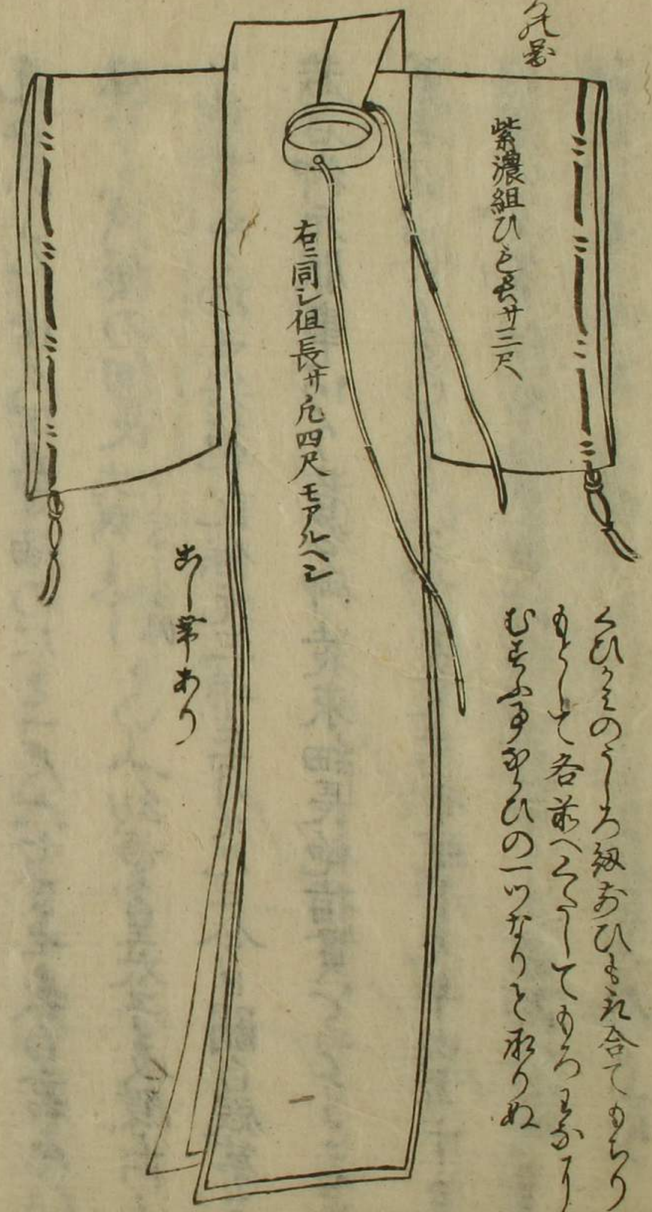
ゝゝゝハうゝの袴ゝ倍しゝてかゝゝゝものゝゝゝの袴ゝ

つゝゝゝ為ゝ為ゝかゝゝ袴ゝゝなゝゝ乃ゝゝ

凡かゝみの圖左乃ゝゝ



○細長ハ狩衣のくひ〻ゝやうにて三ところゞりの袍なり
凡身のたけ宮尺宮寸袖のたき一尺六七寸也表白裏色〻
深なる紋桜の細長 文桜もやうにて 幼童皇太子及殿上ノ
ハ童女なる袍也兵範記保元三年正月廿九日今日關白殿第三
若君御元服事ノ内若君御装束細長袍指貫とめてこそ
若君元服なるもまゝ又女房装束抄建暦元年四月十日
姫君の真菜姫君白重織袍の細長同〻こ織袍の小袖二重
細長と用ひ袴あこめ袴と用ひ色〻例也と見へたり
凡細長乃圖左乃ごとし



えびえのうつろ紐おひもれ合てもちりもつて各並へそつてもちるうむそふまつひの一つなりと形りぬ

師説曰或人問細長ハ御産衣あと用ひるゝ屈うに形りぬ然るハ曰ちゝ也と云ふ委子細ハ已ハ云ふ如き出るゝ儀なりと蓋元永二年或秘記る五月廿八日皇子降誕六月二百の日次日今日第五夜なり院より御養産乃事ハ威儀御膳献の御衣案二脚宰相ハ伝法式のごとく

ハ人こゝを卑件の御衣をこ銀泥をぬりこを上て

ハ乃洲濱同じきを寄亀小松をかく折立ハ亀甲

乃白織物を用ひ下机花足面る亀甲ハ織物を

を ハ泥ぬりてこゝをぬり貝小弓をかく又

鷺あ一の案二脚同しく泥をとりて色をめり
皆白銅乃金物あり四角ゑ白組総をつを面ゑ白大
文乃薄物を押下絵乃白いと紙りて小弓等を
めふ皆一合に八織物乃御衣一襲を納む三重葵乃文薄物を
宇めく薄物の一合ゑ八綾の御衣一襲紙おさむ三重葵丸文小文を
入帷乃
かさねへる一合ゑは綾乃御襠袴二帖平絹の薄襠袴
紙りあり
一帖を納む各二幅長一尺又一合色目おみおれし
へるるる
已上各白織物のつを伏組乃案一脚ゑ二合
伏くる各帕あり薄物の単なり三幅長一尺文三尺白いと紙

ゆて小弓折枝ゑをめふ第一筋調進せむ花鬘
乃義あへく俗眼のおふふ所をとりてふり
ゆれは記ゑ八只織物乃薄衣綾丸御衣とのまく
細巻とハんくを指故実丸人ゆしりめふ
と形りめ

嘗聞冠と服のおこりハ神乃代より名づけて人の
代よりもり漸其位乃ふかまりて君臣上下
弓弟の序をうしなひ人倫禮の成なり他乃
國ゆをもてをしめ鳥獸の冠角にのると凡事冠纓を
法くり麻絲をおさめく布帛とする終小衣裳試
つくりて後世ふるりて貴賤服各等差をなし
東體して朝くりくり人の東體衣冠ゆくさたハ
うやまひたりしたしとを其人とのうりて華服を

著述附ハ是を為さしむる事和漢ともに一のそうく
さを経〳〵をわさま人ちうちんや予いやしくも此
故実をおのゝ盡先生の机下にたゝしく師の述作せる
所位天位裝束暗誦をこゝ学ひ好く彼元とせる本書
に始くうるもしたく〳〵きうためふ日家講習ちうと
自已うすゝ記動物ゝ龍頭傍註ようゝ後ゝ女房
裝束乃まを附〳〵ハ或尊家より裝束要領鈔と
題名を給りぬ是より先ゝ一名にのりさゝ人ともちのち

乃〳〵損益すゝ不をあまハ書名も亦にうたまり如予
志ゝゝゝゝゝ而あらて止事を請されハ師ゝ再三辞ひ
はゝ人乃ゝまをもうゝ見を恣ゝ今刊版〳〵く
徒ゝ忍の機臆とにうゝゝ已

正徳六丙申歳正月上澣　徳田良方

寛保二年　壬戌仲秋吉日

皇都書肆

堀川通高辻上ル町　錦屋七郎兵衛

寺町通松原下ル町　梅村三郎兵衛

求板